

グループワーク「紙芝居の制作と実演」について

菅 舞香

Group Work: “Making and Demonstrating Kamishibai”

Maika Kan

Abstract

Kamishibai is an important teaching material and tool in nursery schools, as are picture books. In my schooling class “Language”, I have been making students to create and demonstrate Kamishibai as group works. In this paper, I consider issues on the future class through the kamishibai works produced by the students over the past five years of classes and their impressions on their kamishibai work creations. Through group works, the students described how they collaborated with each other and devised a piece of work step by step. On the other hand, there was an apparent tendency that most of the completed works were an educational-style Kamishibai. One of the future tasks is to encourage students to increase the number of Kamishibai classified as a story-style which helps the children's imagination to expand.

Keywords: Kamishibai, Group work, Reading aloud to children, Classification of Kamishibai styles: story style, educational style, and engaging style

1. はじめに

保育所保育指針には、「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。」(1歳以上3歳未満児の保育)、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」(3歳以上児の保育)とある。子どもたちは保育者の読み聞かせを通して、みなで一つの物語を共有し、知らない世界に触れ、新たな感情と出会う。新しい言葉を覚え、自分も使ってみたいと思う。紙芝居は、保育の場で、絵本とともに重要な教材・教具である。筆者は、担当するスクーリング授業「言葉」において、グループワークとして、紙芝居の制作と実演を行っている。本論では、これまで5年間の授業で学生たちが制作した紙芝居作品と、作業後に書かれた感想文とともに、これまでの授業を振り返り、合わせて今後の課題を考察する。

2. 紙芝居と保育

紙芝居は、ひとりで楽しむことができない。誰かに実演してもらって、初めてそこにひとつの世界が立ち上がる。芝居の形式をとるので、登場人物のセリフが積み重ねられて、物語が進んでゆく。演じ手は、観客の反応を見ながら演じ方を変える。そこには、声の出し方、間の取り方、紙の抜き方など様々な工夫がある。

現在のような紙芝居の成立は、1930年、東京浅草の失業した寄席芸人や絵師らが、紙に

絵を描いて芝居を演じたことに始まる。作品を企画し配給する貸元、絵を描く画家、作品を借り受け街中で演じる紙芝居業者の三者の分業体制が確立し、街頭紙芝居は瞬間に日本全国に広がった。

子どもたちの反響を見て、紙芝居を応用的に利用する動きがいくつも現れた。聖書の内容を紙芝居にして伝道に使った例、仏教の布教に使った例、幼稚園・保育所への販売用に使った例、左翼活動に使った例、国策宣伝のために使った例などである(石山, 2008: 40 - 44)。このように、教育、宗教、思想等、何らかの教えを広める目的で作られたものを教育紙芝居という。この流れの中で、紙芝居が印刷され本格的な出版制度に乗ったことは大きかった。街頭紙芝居は画家による手描きで、同じ作品は一点しかなかったが、出版販売されればより多くの子どもたちが一度に楽しむことができる。「幼稚園教育要領」においても、1964年、「絵本・紙芝居などに親しみ、想像力を豊かにする」と、初めて紙芝居の位置づけが示された。以後紙芝居は、幼児教育、保育の場で欠かせないものとなっている。

3. 授業の構成

グループワークは、丸一日かけて行われる。冒頭1時間ほどかけて、前章で述べたような紙芝居の成立過程、保育における紙芝居の重要性、制作・演じ方の技術を講義する。また実際の作品を何本か筆者が演じて見せ、対象年齢、作品枚数、スタイル、演じ方を意識させる。

講義の後、それぞれグループに分かれて制作に入る。1グループは、受講人数に合わせて4名から6名、1回の授業で平均4グループが活動する。グループメンバーは、クラスメイトであり、すでに関係はできあがっている。授業によって、複数の専門学校が一緒になることがあるが、同一校生同士のグループ編成にしている。

制作時間は、昼食をはさんで5時間ほどである。学生たちには、実演本番の開始時刻を告げ、それまでに制作と練習を終えるよう指示する。練習時間はできるだけ多くとり、何度も練習するよう伝えている。

実演は、グループごとに前に行き、それ以外のグループは、作品を鑑賞し、評価シートに沿って他グループの作品を評価する。シートには、ストーリー、絵、演じ方、チームワークの4項目を、それぞれ5段階で評価し、最後に実演グループへのメッセージを記入する。終演後、この評価シートを集計し、上位3グループを発表、表彰する。

そして、授業の最後に一日の感想文を書く。

4. 制作

ここからは、前章であげたプロセスを、学生たちの作品、感想文(筆者による抜粋、受講年度を付す)とともに具体的に見ていきたい。

グループでの作業とはいえ、一からストーリーを作り、構成を練り、絵を描き、セリフを考えるという作業に、学生たちは最初途方に暮れる。そこで、スモールステップを踏めば、必ず作品が完成するように、作業工程を7つに分けて提示している。

- | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ステップ 1. 対象年齢を決める
ステップ 2. 作品タイプを決める
ステップ 3. 作品枚数を決める
ステップ 4. 構成を決める
ステップ 5. 場面割りを決める
ステップ 6. セリフ・地の文、絵を決める
ステップ 7. 画用紙への書入れ |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

最初に、どのくらいの年齢の子どもたちを対象とするのか話し合う。対象年齢が決まれば、それに応じた作品枚数やタイプが絞られてくる。近年、赤ちゃん絵本と呼ばれる 0 歳児から 2 歳児を対象とした絵本が注目される中で、紙芝居の世界においても、低年齢児向けの作品が多く出版されている。ストーリーの展開よりも、動物の鳴き声やオノマトペなど、音の響きそのものを楽しむ工夫や、観客である子どもたちも一緒に声を出し、体を動かし参加できる工夫がされている。保育の場で使用される紙芝居作品は、ストーリー展開が重要な物語型のもの、観客に多く問いかけ反応を得ることで成り立つ参加型のもの、手洗いや挨拶、交通安全を教える教育型のものタイプを分けることができる。どのようなタイプの作品を作りたいのか、意見を出し合う。作品の枚数は 10 枚を基準として、対象年齢や作品タイプに合わせて、それより多くするのか、少なくするのか決定する。

構成と場面割りは、講義で例にあげた実際の作品に照らし合わせ、登場人物や場面を設定しながら作っていく。子どもの好む「繰り返し構造」や、「行きて帰りし物語」(瀬田, 1980 : 6) など、構造を意識するとよいと助言している。

最後に、場面割りに応じた絵の作成と、セリフ、地の文の作成をする。ここまでくると、多くのグループから、本番で使う画用紙配布の要求が出る。授業で使用する材料は、八つ切り画用紙、練習用コピー用紙、クレヨン、マジックペンである。ここまでの作業を、午前中の 2 時間で終えるのが望ましい。午後は、実際に絵を描き、セリフや地の文を裏書きする作業に入る。

感想文には、作業開始時の戸惑いや、互いの意見のすり合わせの苦労、工程を踏む中ででき上がる喜びが書かれている。

- ・最初は自分たちだけで紙芝居を作るなんて絶対大変だし難しいだろうなぁと思っていたけど、班のみんなで話し合っているうちに、だんだんと内容が決まってきて、実際にそれを絵にしてみて…とやっているうちに、あっという間に作ることができました。(2017 年度)
- ・子どもの頃、なにげなく好きで見ていた紙芝居でしたが、実際に作る過程を体験してみ

ると、凄く大変なんだと気づきました。(2018年度)

- ・ストーリーの大体の流れを決めることがすごく難しかったです。それぞれの意見がでてきて、それを合わせたり、さらに意見を言い合ったりとすごく難しく感じました。(2018年度)
- ・まず何を題名にするかという事から、正直難しく、時間がかかってしまったけど、一つ案が出たら、すごく考える幅が広まっていった。(2019年度)
- ・年長さん向けのものになると、年少さんよりも想像力、理解力などが高まってくるから、想像をふくらませられるような内容にしなければいけないので、とても難しいと感じました。絵を描くにも、ただ描くだけではなくて、その向きや位置にも理由や効果があることを知り、とても深いなあと思いました。(2018年度)

グループワークであるので、完成作品のみならず、作業そのものも重要である。それぞれに得手不得手がある中で、作業担当を決め、意見を出し合いながら、時間内に制作、実演を行う過程を重視している。

- ・チームワークは良く、自分のが終わったら他人のを手伝ったり、アドバイスしたりってところが見られたので、素敵だなと思いました。他人から言われて納得することが多々あるので、言ってくれる友達を持つことがどれだけすごいことなのかと思いました。(2016年度)
- ・最初は色々な意見があるチームだったので、少しとまどうところもありましたが、楽しく全員でやりとげることができました。(2016年度)
- ・チームワークの大切さをあらためて学ぶことができました。6人それぞれが自分の得意なところを生かし、紙芝居づくりに取り組めたので、スムーズに進めることができたと思います。何か悩んだ時や、わからないことがあって困っている時は、「これどうしたらいいかな?」と班員にといかけると、必ず全員が自分の作業をとめ、一緒になって考えてくれたため、予定時刻より早く作りおえることができました。(2018年度)
- ・紙芝居を作る以前に、普段から本すら読むことのない自分にとって苦痛でしかなかったです。最初は「え〜っ」て感じでしたが、やりはじめるとかなり熱中してしまいました。作業中もグループ内で意見や話し合いが多くあったので空気もよく、最後までやることができました。グループワークが苦手な自分からしてはいい感じで進んだのかなと思います。近大スクーリングでの大きな収穫です。(2018年度)

また作業中は、作品に関する調べものを許可している。世界の童話、料理の作り方、浄水のしくみ等、得られた知識が作品に反映されている。

- ・作品は、料理の材料を絵に書いて、なにができるかなと予想してもらうようなもので

す。作る料理は、簡単で幼児にもわかりやすい人気な料理を調べて書きました。(2018年度)

- ・私たちのグループは、水について制作することになりました。年中向けの教育型にして、おうちまで水が運ばれてくる過程を調べて、紙芝居にしました。子どもたちにダムや浄水場と言っても？になることがあると思ったので、わかりやすく説明も入れました。(2019年度)

- ・1～12月、北海道にどのようなイベントがあるか考えました。北海道全体で見ると、その月々によってきちんとしたイベントがあり、道民だけど自分の知らなかったことがたくさん知れたので良かったと改めて思いました。(2016年度)

制作の過程は長時間に及ぶが、このように学生たちの自主性を重視し、グループ内での関わり合いを大切にしている。

5. 練習

各グループの作業進度によって変動するのが練習時間である。しかし感想文において、最もよく聞かれる反省が、もっと練習するべきだったというものである。

- ・私たちの班は、紙芝居を作るのに時間がかかってしまって、読む練習が全然できていなくて、発表の時にぐだぐだになってしまったのが、くやしかったです。(2019年度)
- ・読み手の声をあわせる所が本番でうまくあわなかったのも、もっと練習しておけば良かったと思いました。(2018年度)

実は最も重要なのがこの練習といってよいほどで、時間をかけて作った良い作品でも、練習時間が足りないと実演がうまくいかず、観客の評価は低い。練習回数を重ねたグループの実演は息が合っており、グループ内の満足度も高いことが感想文からうかがわれる。

- ・練習は、2回できたので良かったと思う。あと3回くらいやっていたら、もっと本番でうまくできたと思う(2018年度)。

そのため、練習時間をできるだけ多く取るよう筆者の方からも働きかけている。

6. 実演

実演は、恥ずかしさとの葛藤である。特に、複数の専門学校が一緒に受講している場合は、他県の学生の目を意識してしまう。グループで前に立つと、緊張が笑いに変わり、一人が笑うと笑いの連鎖が起り、止められなくなる。このような本番での失敗はよく見られるものであるが、なぜ笑ってしまったのか分析し、次につなげようとする感想が見られるのも興味

深い。

- ・演じる前に笑わずにやると目標をたてて行ったのですが、どうしても面白いシーンがあって、しかも、その場面の前で私の抜き間違いで笑ってしまったのが原因で、みんなずっと笑ったままになってしまいました。ひとに面白さを伝えるのに、笑いすぎはダメだったと思いました。(2016年度)

また、講義で習った実演の技術がうまく取り入れられ、さらに独自の工夫が凝らされていることがわかる。

- ・水の流れ方に合わせて、紙の抜き方にもこだわりました。川が流れるようにゆらゆらしながら抜いたり、水の方向に合わせて逆抜きをしたりして、見ていて違和感がないように、また注目を引くように紙芝居が作れたと思います。(2019年度)
- ・ライトで光をあてる場所など工夫して作れて、良い紙芝居が作れたと思います。(2018年度)
- ・裏の台本のところも、ただセリフだけを書くのではなく、「間」などを書き足して、実演をスムーズに行うことができるようにしました。(2016年度)
- ・子どもたちに読み聞かせる時は一人だけど、今日のようにグループで読む場合は、絵が移動しないように工夫しました。(2016年度)

さらに、実演を終えて、観客の反応を見る中での気づきも多い。

- ・終わって思ったのが、内容がおもしろくないという部分です。まじめにやりすぎて、おもしろさが欠けてしまったので、そこは反省しています。もっとおもしろさと、見ている人が物語に入り込むぐらいのクオリティーにしたかったなと思いました。(2018年度)
- ・個人的な改善点は、待っている間と読んでいる時、笑顔でいることだと思った。(2019年度)
- ・字だけをずっと見ていたので、もっと皆の顔を見ながら読むべきだった。はみがきをするところで、見ている子どもにも参加してもらえばよかったと思った。(2018年度)

7. 鑑賞・評価

他グループの作品を鑑賞することで、観客の気持ちを味わうことができる。鑑賞の際は、子どもたちの気持ちになって、ストーリー、絵、演技方、チームワークの4項目に注目、評価するよう伝えている。感想文を見ると、見習いたい点や改善点が多く指摘されている。

- ・他の班では、うたを入れてみたり、みんなで声を合わせ一緒に言ってみたりしていました。これらは子どもたちも喜ぶと思います。子どもたちに喜んでもらえる紙芝居の読み手になりたいと思います。(2018年度)
- ・数人で子ども達の前に立つときは、何も役割がなくふらふらしている人がいると、子ども達の集中が紙芝居ではなくなってしまうので、移動は少なく、均等に役が当たるように配分したい。また、子ども達の周りを動いたり、アクションを起こすと笑いが起きたりして楽しんで見ることができると思う。(2016年度)

8. 作品

5年間の受講生は183名を数え、32グループ、32作品が制作された。これらを、4章で述べた物語型、参加型、教育型に分けて紹介する。もちろん、物語の形式をとりながら参加を促すもの、物語の中に教育的メッセージを含むものと、複数の型をまたぐ作品もある。この場合は、制作の意図として、自分たちはどのタイプに比重を置いたのか各グループに聞いていたので、それに従って分類している。

- ・物語型 8作品
例：有名作品のアレンジ、創作
- ・参加型 7作品
例：シルエット、歌、オノマトペ等
- ・教育型 17作品
例：好き嫌い、歯磨き、行事、おかたづけ等

上図のように、17作品と全体の半分以上が、教育型に分類された。内容を見ると、食べ物の好き嫌いをなくそうというテーマ3例、虫歯と歯磨きを扱ったもの3例、季節や一年間の行事を伝えるもの3例、おかたづけ2例、あいさつ、交通安全、手洗い、友達の大切さ、親への感謝、スマホ依存、水のゆくえ、がそれぞれ1例ずつとなっている。教育型への偏りが目立ったのは、講義で教育紙芝居の起こりについて学んだこと、保育での読み聞かせを想定した時、わかりやすい教育的テーマがあるほうが作品を作りやすかったことがあげられるのではないかと想像する。

物語型は8作品で、一からストーリーを創作したものが6例、有名な物語の登場人物を変えたもの、物語のその後を創作したものが2例であった。創作作品には、くまの誕生日に仲間の動物たちが内緒でケーキを作って驚かすというものや、迷子のヒヨコが困難を乗り越え母親と再会することで、勇気を出して行動する大切さを学ぶものなどがあつた。

参加型は7作品で、シルエットから動物や食べ物を当てるクイズ形式のもの4例の他、おばけと一緒に歌を歌うもの、オノマトペを多用し料理を作っていくものなどが見られた。

9. おわりに

二日間の日程の、後半一日を当てたグループワークは、スクーリング授業の集大成といえる。何もないところから作品を作り、5時間後には実演の発表をしなければならないというプレッシャーは、学生たちに思いのほか重く押し掛かるようである。最初は、思うように意見が出なかつたり、まとまらなかったグループも、提示された工程を一步ずつ踏むうちに、段々形が出来上がってくる。形が見えてくると、グループ内の雰囲気もよくなり、作業する手にも力が入る。にぎやかだった教室が、午後の作業では静まり返る。それぞれ分担当した作業に集中している。授業をする中で、筆者がほっとする瞬間である。

本番の実演では、各グループどのようにしたら観客を楽しませられるか工夫する。登場人物の性格を分析し、キャラクターになりきって声を出したり、ゆっくり読む努力をする。観客を引き込み、笑いが起これば、達成感がある。観客の反応に意識的になる。鑑賞もまた重要である。子どもたちの目になって、他グループの作品を客観的に見ることで、よりよい実演の仕方が見えてくる。このように、制作、実演、鑑賞すべてのプロセスに学びがある。

一方、課題も見えてきた。作品の教育型への偏りである。歯磨きやおかたづけといったわかりやすい教育的テーマは、ストーリーを作りやすいということがあるだろう。しかし、子どもたちにとって紙芝居は、第一に未知の世界への入口であるべきである。主人公になりきって世界を体験し、新しい感情を友達と共有する。その実現には、必ずしも教育を目的とした内容は必要ない。かつて街中で子どもたちを魅了した街頭紙芝居は、内容が奇抜すぎるとして大人たちからは批判を受けた。しかしそこで描かれたのは、冒険物などの活劇、継母と継子の葛藤などの悲劇、滑稽な漫画であり、子どもたちの日常世界とは違う豊かな広がりがあったからこそ、大きな人気を博したのであろう。学生たちの作品に、もっと物語そのものを楽しめる紙芝居を増やすために、どう働きかければよいか、今後の課題である。学生たちが、子どもたちの触れる紙芝居や絵本には、必ず教訓がなければならないと思うことがないよう、紙芝居や絵本の本来の役割を伝えていきたい。

謝辞

本研究にご協力くださった学生のみなさまに心から感謝申し上げます。

参考文献

- 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』 フレーベル館
文部省 (1964) 『幼稚園教育要領』 フレーベル館
菅舞香 (2017) 「紙芝居の形式の成立過程」 『近畿大学九州短期大学紀要』 第 47 号 136 頁 - 142 頁
子どもの文化研究所編 (2015) 『紙芝居一演じ方のコツと基礎理論のテキスト』 一声社
石山幸弘 (2008) 『紙芝居文化史 一資料で読み解く紙芝居の歴史』 萌文書林
瀬田貞二 (1980) 『幼い子の文学』 中公新書